

# 目次

まえがき ..... vii

## 第 I 部 主観性をめぐる研究の総論および概観

---

### 第 1 章

総論 ..... 天野みどり・早瀬尚子 3

—構文研究・(間)主観性研究の展開—

1. はじめに 3
2. 構文 4
3. 主観性—主として言語学分野から— 7
4. 間主観性 13
5. 生態心理学的に見た(間)主観—共同注意(三項関係)— 19
6. 主観性—日本語学分野から— 21

### 第 2 章

4 種類の「主観」の用語法 ..... 小柳智一 33

1. はじめに 33
2. 4 種類の「主観」 33
3. 複数の「主観」の重ね合わせ 43
4. 主観的意味の関わる話題 45
5. おわりに 50

## 第 II 部 言語学・英語学分野

---

### 第 3 章

間主観的から接続的へという変化 ..... 小野寺典子 55

—意味機能変遷のもう 1 つの方向性—

1. はじめに 55

2. 1980年以降の、意味変遷研究における仮説的方向性 56
3. 間主観的機能から接続的機能へという方向性—英・日・リトアニア語からの報告— 58
4. 間主観的から接続的機能へ—話しことばの例—アメリカ英語の延長表現 (GEs)— 61
5. まとめ 間主観的機能から接続的機能へ—アメリカ英語の GEs の場合— 69

#### 第4章

- 構文拡張と主観化の解釈について.....柴崎礼士郎 75
- 英語史における the/my/Ø question is の考察に基づいて—
1. はじめに 75
  2. SN 構文の概要 78
  3. 調査手順と調査結果 80
  4. 構文拡張と主観化 83
  5. 結論 91

#### 第5章

- 譲歩構文からの拡張.....大橋 浩 97
1. はじめに 97
  2. Having said that, that said, that being said 99
  3. 譲歩節の多義 102
  4. 発話行為譲歩文としての HST 譲歩文 105
  5. 逆接からトピックシフトへ 108
  6. 譲歩からトピックシフトへの拡張と(間)主観性 111
  7. おわりに 115

#### 第6章

- フランス語の連結辞 ceci dit, cela dit と語用論化.....渡邊淳也 119
1. はじめに 119
  2. 先行研究 120
  3. コーパス調査 123
  4. Ceci dit 128
  5. Cela dit 131
  6. おわりに 136

## 第7章

後置型懸垂分詞構文について.....早瀬尚子 139

— assuming 節と（間）主観性—

1. はじめに 139
2. 先行研究—従属的要素の前置と後置の違いについて— 140
3. assuming を用いた（懸垂）分詞 142
4. 理論的考察 156
5. まとめ 159

## 第8章

中間構文を含む、英語における無標識可能表現のネットワーク  
.....本多 啓 163

1. はじめに 163
2. 能動受動構文としての中間構文およびその他の中間構文の成立 166
3. ゼロの動作主の読み込みとは何か—具体事例からの検討— 168
4. 能動受動構文としての英語中間構文発生の契機 169
5. 有対能格自動詞以外の場合 170
6. 英語無標識可能表現の意味構造とネットワーク 170
7. 主体性および間主観性の観点からの位置づけ 172
8. 構文理論における位置づけ 177
9. 結語 179

## 第Ⅲ部 日本語学分野

## 第9章

日本語主題構文と主観性.....益岡隆志 185

1. はじめに 185
2. 日本語における主題構文の形成 186
3. ハ主題構文と無標識主題構文 189
4. 階層構成的モダリティから見た主題構文 192
5. 英語の主題構文 195
6. 日本語主題構文における主観性 197
7. おわりに 200

## 第10章

「て+みせる」の文法化	青木博史	203
1. はじめに		203
2. 現代語における「て+みせる」の用法		205
3. 「て+みせる」の歴史		210
4. 補助動詞の文法化		213
5. おわりに		218

## 第11章

感情形容詞の連用修飾	井本 亮	221
—主観性を導く構文の機能—		
1. はじめに		221
2. 問題の所在と分析の観点		222
3. 形容詞分類と感情喚起の連用修飾成分		224
4. 感情形容詞の連用修飾用法		226
5. 話者読みと主観性		229
6. 形容詞連用修飾の構文機能		230
7. おわりに—まとめと今後の課題・展望—		237

## 第12章

逆接の意味と構文	天野みどり	241
—逸脱的なノラ文・ノガ文の意味解釈を中心に—		
1. はじめに		241
2. 逸脱的なノラ文・ノガ文とは		242
3. 《逆接》《対比》とは		243
4. 逸脱的なノラ文・ノガ文の《逆接性》《対比性》の検討		246
5. 連体修飾節を伴う連用句を有する文に《逆接性》が解釈されるとき		250
6. 《逆接》の意味と《主観性》		254
7. おわりに		258

## 第13章

「可能性判断」と「構文」	三宅知宏	261
1. はじめに		261
2. 考察の前提		263

3. 「語」の内部構造のレベル — 「可能性判断」の形成と構文 —	267
4. 「節」のレベル — 「懸念構文」の形成と「可能性判断」 —	269
5. おわりに	276

執筆者紹介	277
-------	-----

## まえがき

本書は、言語学・英語学・日本語学の分野を越えて「構文」に関心を寄せる研究者が集い、通言語的な研究発展をめざして2018年から進めてきた研究の成果です。

「構文」の定義は研究者により異なりますが、本書には、文の全体性に着目しているという重要な共通点があります。文は、いくつかの構成要素が様々に結び付けられ実に多様な意味を表すことができますが、さらに、結び付けられた全体は、その全体が表す意味との結び付きが固定的になり、もはや要素の総和では得られない意味に拡張することがあります。構文の持つこうした全体性や類型性、形式と意味の固定化や慣習化の問題は、言語の別を問わず、実際の言語運用や言語の歴史的变化事象と関わり、言語を論じる上でとても重要なものです。この観点から具体的な言語現象を考察すること、これが本書の第一の課題です。

さらに、本書では、「構文」を「主観性」という観点から論じることを第二の課題としました。

発話者の認識や判断、心情に関する意味がどのように言語形式で表されるかについての研究は、今に始まったことではありません。従って、言語の形式と意味を論じる概念としての「主観性」とは何か、この概念をどのように捉えれば、どのような言語現象を説明するのに有効なものとなるのかということも、言語学・英語学・日本語学の分野それぞれにおいて長い時間をかけて論じられてきました。しかし、近年、新たな言語理論、特に認知言語学を基盤とした「主観性」概念が急速に通言語的に用いられるようになり、それにつれて従来の説明概念である「主観性」との差異など、問題点も浮き彫りになりつつあります。本書では、こうした研究状況の中で、個別言語を考察対象として発展してきたそれぞれの研究分野の土台を尊重しつつ、さらに通言語的な考察も深化させるために、「主観性」概念そのものを改めて相互に考察することとしたのです。

この試みは大変難しいものであり、「主観性」とは何かについて根本から考えることにもなりました。「構文」を「主観性」の観点から論じる前に、一度立ち止まって「主観性」概念をきちんと整理し考察する必要があることを痛感したということも、一つの成果と言えるのかも知れません。分野横断的に学び合う中で突き当たった問題は、この論文集の読者の方々とともに、今後も引き続き考えていくべきものと思います。

本書は、大きく三つの部分からなります。第Ⅰ部〈主観性をめぐる研究の総論および概観〉、第Ⅱ部〈言語学・英語学分野〉からの論考と、第Ⅲ部〈日本語学分野〉からの論考の三つです。

まず、第Ⅰ部〈主観性をめぐる研究の総論および概観〉では、編者により言語学・英語学・日本語学分野で進められてきた主観性をめぐる研究を概説します。

総論に続く小柳論文は、この総論を別の観点から補完するものと位置付けられます。小柳論文は発話者の「認識原点」からの認識を反映した、あるいはその認識に拘束された意味を「主観」とした上で、日本語研究で用いられる「主観」の主要な用語法を四種に分け、それぞれに「主観」の性質が異なることを示します。言語学・英語学分野での主観性概念の使われ方に対して、原理的に再検討を行い、言語研究のための学術用語としてどのような「主観」「主観化」という考え方が有効であるのかを検討する論考です。

続く第Ⅱ部〈言語学・英語学分野〉の論考は、大別して語彙的連鎖を構文として扱うものと、いわゆる文構造を持つタイプを構文として扱うものに分けられます。主に最初の四編は語彙的連鎖が一つのチャンクを成し、新しい機能を獲得するに至った、いわば語彙的構文化の事例を扱ったものとなっています。このタイプは従来「語彙化」というカテゴリーに収められていましたが、近年では語彙化においても類似表現のバリエーションが生まれて構文スキーマが取り出されうることが指摘されています。特に英語におけるこういった現象について着目したのが、小野寺論文と柴崎論文です。また一方

で、一つのチャンクを成した構成体 (construct) それ自体が類例を持たない独立した構文として特有の意味用法を發展させるケースもあり、特に譲歩という意味を表す表現について、フランス語と英語というそれぞれ別の言語から検討を加えているのが渡邊論文と大橋論文です。

小野寺論文では、主に対話のデータを基にした、and stuff/and things/and all that/or something など、例示が他にもありうることを示唆する「延長表現 (general extender)」と呼ばれる連鎖表現を扱っています。これらは互いに類似性を持ったバリエーションを持つ語彙構文的な性質を持っており、またその意味が、間主観的な機能からテキスト接続的な機能へと変遷していることを主張しています。Traugott (2003) (“From subjectification to intersubjectification,” Hickey R. (ed.) *Motives for Language Change*, 124–140, Cambridge University Press) が提案してきた意味の変遷では、間主観性が変化の終点となる方向性が主に強調されてきましたが、そうではなく別の方向性も存在すると考える提案 (もともと初期の Traugott (1989) (“On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change,” *Language* 65-1: 31–55) で行われていた提案を掘り起こした形になる) を行っています。

同じく対話のデータに関心を寄せる柴崎論文では、英語の the question is という語彙構文的な連鎖を共時的かつ通時的に追っていきます。そしてこの表現が自らの立場や意見という主観を表明する語用論標識化したスタンス表現へと変化していること、また the question is の他に my question is や question is など、その類例が認められてさらに拡張していることから、Traugott and Trousdale (2013) (*Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press) で議論される構文 (変) 化として捉えられるという現状を考察しています。

大橋論文では、having said that、that said、being said という連鎖が語彙化・構文化として扱えることを述べ、これらが表す譲歩という意味が主観的かつ



間主観的な性質を持っていること、また間主観的な意味を獲得したのちにテキスト連結機能を果たすように変化していることから、(小野寺論文と同じく) Traugott (2003) の提案する「間主観化に先立って主観化がおこる」とする一方向性には当たらず、むしろ Traugott (1989) での接続機能へという別の方向性を示唆するものと主張しています。

同じく譲歩を表現するフランス語からの例として、渡邊論文では *ceci dit, cela dit* という連結的表現を扱っています。この表現は、Traugott and Trousdale (2013) が述べる語彙的構文化(いわゆる語彙化として扱われているもの)に相当しますが、これらが発話行為を介して談話のコンテキストで留保の意味を発達させる現象を「語用論化 (pragmaticalization)」という用語を用いて規定しています。もともと時間表現であったものから、話者が自らの発話内容に加えて言いつのったり念押しをしたりしていることを聞き手にメタ的に明示して示すものへと変化しており、談話標識的かつ Dialogic (対話的) な側面を増すようになってしていると論じています。

言語学・英語学分野の残る二編は文レベルにおいて構文を捉えた論考です。早瀬論文では、Langacker (1990) (“Subjectification,” *Cognitive Linguistics* 1-1: 5-38) が述べるような主体性が確認できる懸垂分詞構文のうち、その後置型における意味について考察しています。そのケーススタディとして、*assuming* 節が後置されて用いられた場合には、Verhagen (2005) (*Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*, Oxford University Press) が主張する「論証性 (argumentativity)」に基づいた間主観性に相当する意味が得られることを主張しています。またこの意味は前置型には見られないことから、同じ懸垂分詞構文であっても語順により異なる構文を認める可能性(具体的には動詞特定構文としての可能性)を示唆しています。

本多論文は英語の中間構文を含んだ可能表現一般を扱い、それらが共通した経験基盤を持つ表現形式として、互いに有機的につながりあっていること

を、構文ネットワークを用いて示しています。ある事態を引き起こそうと意図的に働きかけるものから、それがうまくいかないことの経験を通じて、その原因を主語に帰属させる、という経験的な再分析がなされていくことで、それぞれの意味の違いが互に関連付けられることを提示したものです。その背景にはエコロジカル・セルフという、Langackerの主体性を生態心理学的に裏付ける「見えない自分、言えない自分」を、他者にも拡張した解釈、つまり自分と異なる他者にとっての見え方感じ方を知覚するという能力が基盤になっていると主張します。

第Ⅲ部〈日本語学分野〉は、歴史的変化研究の観点から主観性に関わる構文を論じる青木論文と、現代語研究の観点から論じる益岡・井本・天野・三宅論文があります。

益岡論文は複合的な内部構造を持つ文形式である属性叙述文を構文とみなす伝統的な立場に立っています。「主題解説」という関係は、益岡(2014) (『文の意味階層構造と叙述の類型』澤田治美編『ひつじ意味論講座3 モダリティⅠ：理論と方法』85-97. ひつじ書房)では文の意味的構成や意味階層の概念となじみにくいとされていましたが、本論文では属性叙述文と「主観性」の関わりを論じ、「は」の主題解説文は判断のモダリティ、無標識主題解説文は発話のモダリティに位置付けられるとする新たな提案を行っています。

青木論文は「て+みせる」という連結的な表現が全体として発話者の「評価」を表す機能を持つことを論じており、文文化を通じた構文化との関連性が見られる現象を扱っていると言えます。「て+みる」や「て+おく」と同様に、「意図的行為」を表す動詞がその“意図”に焦点を当てて文文化したものとされ、発話者の「評価」を表す多様な表現が歴史的に作り出されていることを明らかにしています。

井本論文は(明確な使用基盤的手法を採用しているわけではないもの)

使用基盤的な発想を受け入れた新しい構文の定義に基づいた論考となっています。事態把握のスタンスの意味で「主体性」概念を用いて「バス停がさびしく立っていた」のような連用修飾用法を記述し、その成立は構文的観点から論じる必要があることを述べています。

天野論文は、ある自動詞構文・他動詞構文の意味を引き継ぐ逸脱的な「ノガ」文・「ノヲ」文や、非制限的連体修飾節文が逆接的な意味に解釈される現象を論じています。合わせて、逆接・対比とは何か、どのような意味において「主観性」を持つと言えるかについて考察した結果、逆接・対比に関わる「主観性」概念を、捉えに関する「主観性」、意味階層構造に関わる「主観性」、心情の意味的特徴としての「主観性」に分けています。

三宅論文は構成的な規則依存的性質と非構成的な構文とを共存させたいという立場に立った構文の定義を行っています。「事態（言語レベルでは「命題」）に対する、話者の把握のあり方」という意味で「主観性」を持つと言える「認識的モダリティ」のうち、「可能性判断」を表す「かもしれない」を扱っています。「いつ～かもしれない」の型全体に特定の意味が固定していることを精査した上で「懸念構文」を設定し、その意味に可能性判断の「かもしれない」がどのように貢献するかを論じています。

本書は、2017年に『構文の意味と拡がり』というタイトルで同じくろしお出版から刊行された論文集と同じ編者による論文集です。言語学・英語学・日本語学の分野を越えて、構文に関心を寄せる研究者が相互に学び合うという点も共通しています。しかし、本書は、歴史的研究や「主観性」概念の考察という新たな観点が加わり、それに伴い執筆者も異なります。同じ論文集の第二号ではなく、『構文の意味と拡がり』を核にして発展的に生み出された新たな論文集なのです。このような位置付けの論文集の刊行をお引き受けくださった、くろしお出版、特に前論文集の時から引き続きご担当くださり、研究会にも出席しながら、よりよい論文集へと導いてくださった編集者の荻原典子氏に心よりお礼申し上げます。

本書は冒頭に書いたように2018年から準備していたにも関わらず、刊行までに3年も要してしまいました。新型コロナウイルスの感染拡大状況は、こうした研究論文の執筆や編集作業にも影響を及ぼしました。刊行が遅れ、執筆者ならびにくろしお出版の皆様大変御迷惑をお掛けしましたことを心よりお詫び申し上げます。

最後になりますが、そもそも2017年刊行の『構文の意味と拡がり』のきっかけとなるワークショップを2012年に開催くださった益岡隆志先生には、本書の作成過程でも、他分野間の交わる中心的立場で構文研究・主観性研究の意義をお示しいただき、研究を牽引していただきました。心より感謝申し上げます。

本書が、多くの方の構文研究・言語研究に、何かの形で貢献できますよう、願っています。

編者

# 第1章

## 総論

### 構文研究・(間)主観性研究の展開

天野みどり・早瀬尚子

#### 1. はじめに

本書は、言語学における「構文」現象をとりあげて共通のテーマとし、言語学・英語学・日本語学の分野それぞれの知見を集めたものである。「構文」という言語単位は現在では言語学・英語学・日本語学それぞれの学問領域内で導入され発展を見せているが、現状ではそれぞれの領域内でやや閉じた形で研究されている。この認識から脱却するきっかけになることをめざし、本書では領域ごとに特化した学術概念や方法論の違いを超えて問題を共有し、相互に影響を与え合い、さらに発展的な研究へとつなげようとする一つの試みを意図したものである。

さらに本書は、特に構文が表す「主観性」の問題に焦点を当てることも第二の共通テーマとしている。個別言語の具体的事例分析を通じて、「主観性」がどのような形で顕現しているのか、に基づくこととする。

この「構文に現れる主観性」という二本立てのテーマを前提とするに当たり、この総論ではまず2節で「構文」にまつわる流れについて概説し、また「主観性」についての現状は、3・4・5節で主に言語学分野から、6節で

## 第2章

# 4種類の「主観」の用語法

小柳智一

### 1. はじめに

現在の日本語研究で「主観」という用語は、様々に使われている。用語と用語法の問題なので、定義次第でどのように使うこともできるが、複数の異なる用語法があることを知らないで、無用な混乱が生じかねない。

「主観」という用語の適当な用語法については、私の観点から考えたことがある（小柳（2018: 第8章）。以下、前稿）。そこでの結論は現在でも変更の必要を感じないが、新たに考えたいこともあり、再び取り上げようと思う。前稿で取り上げなかった観点も含め、「主観」の用語法を整理し、具体例に即して用語法の違いを明らかにするのが本論の目的である。

用語の問題は、研究対象をどう捉えるかの問題であると同時に、研究者がどう捉えるのかの問題である。用語の使用に自覚的であることは、論理の筋道と思考の過程を明晰にすることに貢献するはずである。

### 2. 4種類の「主観」

「主観」という語は、日常的な使用から専門的な使用まで広がり、その幅に見合って多義的だが、日本語研究での主要な用語法は4種類だと思われる。

## 第3章

# 間主観的から接続的へという変化<sup>1</sup>

意味機能変遷のもう1つの方向性

小野寺典子

### 1. はじめに

これまでの意味変遷 (semantic change) 研究では、意味機能の発達・変遷について数多くの傾向や方向性 (tendencies, clines) (Traugott 1989; 1995; 2010, トラウゴット 2011, Brinton 1996; 2017, Heine 2013 他) が提案され、この分野では次第に、「A という意味から B という意味へ」の発達という一方向性 (unidirectionality) が議論的となってきた。特に 1980 年頃から、主に文法化に伴う意味変遷について Traugott (1982(1980); 1989) による提案に始まる主要な傾向が提唱され<sup>2</sup>、単に意味の変化のみならず、言語

1 この論文で指摘する「接続的へ」(接続機能; textual function)は、Traugott(1982(1980))、Halliday and Hasan (1976)、Silverstein (1976) などによる言語の接続 (linking) 機能を指している。Textual function のより最近の解釈に、談話構成機能 (discourse-structuring function; 話題転換や話題の再開などより具体的機能を含める)があるが、それではなく、それ以前の言語の基本的3機能(命題・接続・表出機能)の1つであり、より抽象レベルの接続機能を指している。

2 文法化研究では、意味機能と形式の双方の発達を見るが、形式面の発達に伴う傾向についても多くの指摘・提案がされてきた。一部を挙げれば、「脱範疇化」(deategorialization; Heine, Claudi, and Hünemeyer 1991: 213, Hopper 1991: 30–31, Hopper and Traugott 1993: 103–113)、「重層化」(layering; Hopper 1991: 22)、「特殊化」(specialization; Hopper 1991)、「融合」(coalescence; Lehmann 1995: 148–149)、「音韻的減少・浸食 (phonological attrition/

## 第4章

# 構文拡張と主観化の解釈について

英語史における the/my/∅ question is の考察に基づいて

柴崎礼士郎

### 1. はじめに

本論では、西欧言語に広く確認できる「貝殻名詞構文 (shell noun construction の試訳、以下 SN 構文)」の歴史的発達に注目する。とりわけ、英語史の中でも中英語末期から事例が確認可能な the question is ~ 「問題は ~、聞いておきたいのですが、私の疑問ですが、等」を取り上げ、その変異形あるいは構文拡張事例と判断できる my question is ~、∅ question is ~ (無冠詞形) の歴史的発達と談話機能から、構文拡張に基づく統語変化と主観化の関係を考察する。以下に現代英語から事例を紹介し、考察点を確認しておく。該当箇所には下線を施し、使用コーパスは参考文献欄に掲載する。日本語訳は特に明示のない限り筆者による試訳であり、the question is ~ は文脈に応じた意識である。以下、the question is ~ などの「~」は省略する。

- (1) And that's just the fact, and that's the way it's going to be in the near term. The question is, how quickly can they diversify away from that?  
「それが事実で、近いうちにそのようになるでしょう。聞いておきたいのですが、彼らはどれくらい早くそこから脱却し多角化を図れるでしょうか」  
(2017 *Fresh Air*: SPOK, COCA)
- (2) SUNNY-HOSTIN# I hope so, but my question is, does that tarnish her



## 第5章

# 譲歩構文からの拡張

大橋 浩

### 1. はじめに

意味変化研究において、語や句が譲歩の意味を表すようになる変化については König (1985; 1988)、König and Siemund (2000)、Harris (1988) などがある一方、譲歩の意味を持つ語や句が新たな意味を発達させる変化については、それほど注目されてこなかったように思われる<sup>1</sup>。この状況には、König による次の一節に述べられているように、譲歩という意味の複雑さが関連していると考えられる。

- (1) (...) concessive sentences are a dead end street for interpretative augmentation. (König 1985: 2)

Traugott などが主張するように<sup>2</sup>、意味変化は、ある要素が特定の場面で使用された際に生じる語用論的推意 (pragmatic implicature) から始まり、その推意で繰り返し用いられて新たな意味として定着することによって起こるとすると、譲歩の意味の認定には多くの情報が関与しているために、そこから新

1 1,000 以上の言語における文法化の方向性を調査した Kuteva et al. (2019) では、譲歩の意味を起点 (source) とする文法化の事例は報告されていない。

2 Hopper and Traugott (1993)、Traugott and Dasher (2002) などを参照。



## 第7章

# 後置型懸垂分詞構文について

assuming 節と（間）主観性

早瀬尚子

### 1. はじめに

筆者はこれまで、懸垂分詞節が主節に先行する前置型の懸垂分詞構文のもつ意味が特徴的に偏っていることを、コーパスデータをもとに調査してきた（早瀬 2009、Hayase 2011）。そこで明らかになったこととして、この形式全体で、その部分の総和以上となる構文的な意味をもっていることを挙げた。具体的には「(概念化者が) 懸垂分詞の能動的行為を行った結果、(概念化者が) 主節の状態を発見・認識する」という意味が、構文全体として得られることを明らかにした。つまり懸垂分詞節は、言語上非明示となる概念化者（典型的には話者）がとり行う行為を表すことに大きく偏った解釈を受けるのである。またこれを出発点として、懸垂分詞（節）そのものが話者視点の意味を発達させていることを個々の事例で考察した。considering/moving on (Hayase 2014)、supposing (早瀬 2015b)、granted (早瀬 2015a; 2017b)、speaking of which (早瀬 2017a)、および given (早瀬 2020) などはその一連の流れにある事例研究であり、いずれも懸垂分詞節が間主観化・語用論化・談話標識化していることを主張した。

これまでの調査対象はすべて懸垂分詞節が主節に先行する位置に生じている事例であった。主語不一致例の頻度が主節に先行する事例に大きく偏って

## 第 8 章

# 中間構文を含む、英語における 無標識可能表現のネットワーク

本多 啓

### 1. はじめに

本論は英語の無標識可能表現のネットワークを示し、それについて主体性・間主観性の観点および構文の観点から検討することを目標とする<sup>1</sup>。

本論で英語の無標識可能表現として想定しているのは、まず第一に次に挙げるようないわゆる「中間構文」である。

- (1) a. This book **reads** easily. (無対他動詞)
- b. The door **closes** easily. (有対能格他動詞)

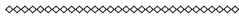
これらは被動者 (patient) 項が主語になっているため、いわゆる「能動受動」として能動と受動の対立という意味でのヴォイスの枠組みで議論されることがある。だがその一方で、これらには可能表現としての面もあることが知られている。たとえば Fellbaum (1985) は中間構文が “generic doability” を表すとしている<sup>2</sup>。

次のようないわゆる「擬似中間構文」では被動者以外の項が主語になって

1 本論は本多 (2014; 2018) を本書の共通テーマである「構文と主観性・主体性」の観点からまとめ直して修正と補足を加えたものである。ただし本論における議論は歴史的な実証を含むものではなく共時的な事実に基づく再構築である。また本論を大幅に拡張したものが本多 (執筆中) となる予定である。

2 これについての議論は、本多 (2002; 2005; 2014) を参照のこと。

## 第9章



# 日本語主題構文と主観性

益岡隆志

### 1. はじめに

日本語の文研究における最重要課題の1つが主題 (topic) の研究である。主題の問題が重要課題として長く研究されてきたのは、言うまでもなく、不変化詞 (助詞) 「ハ」の文法的な性格を突き止めるのが困難であり、「ハ」と「ガ」の使い分けに対する説明が容易ならざることによる<sup>1</sup>。本論は、「ハ」が文の主題を表示する代表的な形式であるという見方—これは従来の見方を受け継ぐものである—のもとで、日本語の主題の問題をめぐる筆者の関心に由来する観点から考察しようとするものである。

本論の考察の出発点となるのは、主題が解説と組み合わせあって「主題・解説」(topic-comment)の二部構造 (bipartite structure) を形成するという点である。主題は二部構造という全体枠 (ゲシュタルト) のなかで機能する構成要素である。そこで本論では、主題の表現を「構文」として捉え「主題構文」という名称を用いることにする。

主題構文が主題・解説という二部構造をなすという点には、所与の対象の特徴・特性 (「属性」(property)) を述べるという叙述様式 (「属性叙述」

---

1 日本語の主題を扱った単行本は、近年刊行されたものに限っても野田 (1996)、丹羽 (2006)、堀川 (2012) など多数に上る。

## 第10章

# 「て+みせる」の文法化

青木博史

### 1. はじめに

#### 1.1 「補助動詞」と「構文」

現代日本語の「補助動詞」について、『日本語学大辞典』（東京堂出版、2018年）には、「動詞に付加され、さまざまな意味・機能を述部あるいは文全体に付け加える動詞型活用成分の一種」との説明がある（「補助動詞」（山田敏弘氏執筆）。具体的には、アスペクトに関する「～ている」「～である」「～ておく」「～てしまう」、恩恵の授受を表す「～てやる」「～てくれる」「～てもらう」、移動の方向性を表す「～ていく」「～てくる」、試行を表す「～てみる」「～てみせる」といった形式が挙げられている。

こうした「補助動詞」によって形成される文を、益岡（2013: 11-35）では、「補助動詞構文」と呼ばれている。益岡論文での「構文」は、「文を構成する基幹的部分（pp. 1-2）」と定義されるため、その外延がやや曖昧ではあるが、補助動詞構文では、元になる「本動詞構文」における名詞句（モノ）の部分が述語句（コト）に置き換えられるという、「コト拡張」が見られると述べられている。

- (1) a. イチローが花子に写真を見せた。
- b. イチローが花子にピアノを弾いてみせた。

## 第 11 章

# 感情形容詞の連用修飾

## 主観性を導く構文の機能

井本 亮

### 1. はじめに

本論は次のような形容詞の連用修飾用法について考察するものである。

- (1) 白い無地の皿の上に載せられた四角いチーズ・トースト。きれいに焦げて、上に載せたチーズも心地よくとろけている。

(『騎士団長殺し』下線は筆者による。以下同様)

(1) における連用形(ク形)形容詞「心地よく」は述語動詞句が表す「チーズがとろけている」というデキゴトにおけるサマを特定するという読みを持つ、いわゆる情態修飾関係の読みである。このとき〈心地よい〉の持ち主は話者であると解釈できる(「チーズ」の感情ではないという読みが可能)。

このような、話者や主語の感情を参照してサマを特定すると解釈できる連用修飾用法を「感情喚起の修飾関係」と呼ぶことにする。本論の目的は感情喚起の修飾関係がどのような要因で成立しているのかを、主観性と構文機能の観点から明らかにすることである。

本論の構成は以下の通りである。次節では問題の所在を確認し分析の観点を確認する。次に3節で形容詞研究からの知見をもとに形容詞の語彙的特徴を確認し、4節で感情喚起の修飾関係の複数の読みの相互関係を位置づける。その後5節で主観性の面からこの修飾関係の特性について考察し、6節

## 第12章

# 逆接の意味と構文

逸脱的なノヲ文・ノガ文の意味解釈を中心に

天野みどり

### 1. はじめに

次のような逸脱的な特徴を持つノヲ文・ノガ文は、そのノヲ・ノガを《逆接》を表す接続助詞ノニと言い換えても大きく意味を変えないことから、そのノヲ・ノガは接続助詞であるとされることがある。

- (1) 二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」  
(レー 1988)
- (2) 今まででは暴風雨を警戒していればよかったのが、近年、静穏な日にも災害がおこる。  
(レー 1988)

本論は、逸脱的なノヲ文・ノガ文は、ある他動詞構文・自動詞構文に属するものであり、その他動詞構文・自動詞構文の意味的な特徴や文法的特徴を有していると考えられる立場から、この種の例文について観察される《逆接的な意味》がなぜ生じるのかについて考察する。また、同様に《逆接的な意味》が解釈される連体修飾節を有する文を考察し、《逆接的な意味》が語用論的に解釈されやすい構文の持つ形式的・意味の共通点を述べる。

さらに、《逆接》とは何かを考え、《逆接》の意味を表す接続助詞や接続詞等の接続表現と《主観性》概念との関わりを考察する。



## 第13章

# 「可能性判断」と「構文」

三宅知宏

### 1. はじめに

本論は、日本語における“カモシレナイ”という文末形式（助動詞）を取り上げ、「語」の内部構造のレベル、及び、他の要素との共起関係という「節」のレベルのそれぞれにおいて、「構文」の観点から分析を行うことを目的とする。

本論の論点は、次のように集約される。

#### ①「語」の内部構造のレベル

“カモシレナイ”という形式は、それ自体が一体となった形式でありながら、さらに構成要素に分けられるという点で、内部構造を持つ形式である。

そしてそれによって表される意味は、三宅（2011）で「認知的モダリティ」における「可能性判断」（詳細は後述）と呼ばれるものである。ただしそれは内部の構成要素の意味の総和からでは得られない。換言すると、「可能性判断」という意味は、“カモシレナイ”の内部構造に還元することはできないということであり、その点で、“カモシレナイ”という形式は、ある種の「構文」とみなし得る<sup>1</sup>。

1 本論において「構文」をどのように捉えているかについては後述する。